

農業の新たな可能性を拓く新規参入者 ——障害者の自立を目指した農業経営——

農民（業）塾運動の達人、今村奈良臣東大名誉教授の後を継いで「21世紀大分農業塾」の塾長を引き受けてから7年目となった。1期2年の塾も4期目に入り、名称も「農業講座」に、役職名も校長へと変わった。講演会・夜なべ談義といった定番メニューに、「校長による生徒訪問」「中国視察」「東大弥生講堂での開催」といった新機軸を加えて、毎年5～6回の講座を開いている。大分県農業の次代を担う農業経営者に地域農業のリーダーとしての力量を身につけてもらい、生徒の間に縦横のネットワークを築き上げる一助にしてみようことがねらいである。

生徒は県内12の振興局を単位とし、1地区2名ほどを目安にして、推薦と応募の組み合わせで選抜される。1期目は31人とやや多かったが、今は24人にまで絞り込まれている。作目・畜種で区分すると、野菜8、果樹7、花卉4、工芸2、畜産2、米麦1となっていて、大分県農業の構造を反映したものだが、やはり米麦作や畜産がいつも少ない。年齢は20代8人、30代14人、40代2人と若々しい雰囲気のみならず構成となっている。これまでに79人の卒業生を送り出してきたのだが、地元の新聞に卒業生関連の記事が掲載されるたびに、着実に地域リーダーが育ちつつあると実感できることが校長としての最大の喜びである。

とはいえ、徐々に生徒数が減ってきたのは、本当に熱心な生徒に絞り込んだという、こちらの方針もあるが、どうやら、若い・力のある後継者が減ってきたことが背景にあるのではないかと秘かに心配していた。ところが、今春、4期目に入って驚くことが二つあった。一つは県外からの新規参入者が3人も生徒になったこと、もう一つはそれに加えて、精神障害者の社会復帰支援のための農業経営を開設した若者が2人も生徒になったことである。

県外からの新規参入者は茶（7.4ha、熊本から3年前に入植した28歳のTT君）、黒豚（母豚130頭、鹿児島から入植した28歳のFT君）、ハウス小ねぎ（75a、4年前

に福岡県から就農した37歳の吉田宗浩君)の専業である。また、35歳の五島俊雄君は3年前から社会福祉法人の事業の一環として精神障害者26人を抱えたハウス花卉栽培(40a, スプレー菊・観葉植物)に進出している。

ここで少しだけ紹介する吉田宗広君は新規参入でかつ、精神障害者の社会復帰支援に取り組む異色の人材である。福岡県北九州市で不動産会社を経営していた彼は34歳の時に福祉施設で働いていた父親の薦めで一念発起し、福祉事業への転身を決意した。そして、母方の実家が中津市にあり75aの農地があったことから、これを活用して精神障害者が自立できような雇用の場の創出を考えた。

宇佐市から中津市にかけては量販店サミットなどでも販売されている「大分味一ねぎ」の有力な産地である。これならば、周年栽培が可能であり、室内で実施できる調製作業に障害者が取り組み、通年的に仕事がある。また、一人一人の症状と能力に応じて作業量を徐々に増やせば、リハビリにもなる。そこで、ハウス小ねぎを栽培することにした。そして、福祉施設や病院をかけずり回って、現在では年間9人の雇用を実現している。当初は数時間しか働けなかった人も今では週の過半を仕事場で過ごすまでになっているという。

私が嬉しく思うのはこの「大分味一ネギ」生産者の若きリーダーこそ、第1期の塾頭を務めてくれた大窪勉君であり(昨年5月に宇佐神宮の門前にねぎ焼き屋をオープンした)、一緒に活動しているのが第2期生の横市稔君だということである。そして、第4期生の吉田君が食材としての小ねぎに障害者のリハビリ素材としての新たな可能性を発見してくれたことである。ネットワークは確実に広がりつつある。そして、わずか24人の生徒のうちで2人も、障害者の社会復帰支援経営を立ち上げるなど、農業が有する多面的機能のウイングは我々の予想をはるかに超えて広がっている。

このような農業が有する限りない可能性を発揮させる上では、もはや農水省だけでなく文部科学省や厚生労働省が農業に参入することが求められているのかもしれない。

(東京大学大学院農学生命科学研究科教授 谷口信和・たにくちのぶかず)